

## 研究ノート

### 恩師・平岡敏夫先生を偲んで

#### —文学史家と詩人—

##### 一、はじめに

平岡敏夫先生は昨年三月五日に享年八十八歳で亡くなった。米寿の誕生日の四日後だった。

私は平岡先生の教え子の中で最も不肖の教え子だったが、亡くなる一週間ほど前にたまたま緊急入院なさった病院に後輩の西さんと一緒に伺って、最後にお目にかかることができた。

その時先生は私を枕元に呼んで、「小林さん、ロンドンの漱石ではないのですが、この病院にスパイがいるのですよ。私は見張られているのです」と小声で何度もおっしゃった。私はそれがせん妄という症状であることはすぐわかったが、平岡先生がそのような状態でも「ロンドンの漱石」という言葉を出されたことに胸打たれた。

私は大学で漱石に関する講義を持っているが、それはほとんど平岡先生からの受け売りで、〈淋しい坊っちゃん〉や〈佐幕派の坊っちゃん〉という視点を教えて下さったのはもちろん平岡先生だった。先生は最期まで偉大なる漱石研究者だった。先生の幻覚の中にはロンドンの孤独な漱石がいたのだ。

先生は昔からとてもマメな方で、常磐線の中でも官製はがきをしおり

代わりに本に挟んで、すぐに論文やご著作のお礼状を書いてらっしゃった。つくばエクスプレスの無かった時代にご自宅から筑波大学への長く不便な通勤時間を過ごした車中は平岡先生のもう一つの書齋だった。

晩年になると先生は頻繁にお手紙を下さって、私には三島由紀夫の絵がついた葉書か綺麗な包装紙で手作りされた封筒がいつも使われていた。多分ひとりひとりに違った封筒や葉書を使ってくださっていたのだろう。そこには先生の文章の抜き刷りだけでなく私には三島に関する新聞記事などのコピーが入っていた。先生から頂いた近代文学に関する抜き刷りが箱いっぱい私の手元にはあって、それは大切な宝物になっている。

一昨年の十月に珍しく私の家にお電話をくださって、北新宿の会で先生の後を受けて翌年の講義を引き受けてほしいというお話だった。その時は、お引き受けするのはやぶさかではありませんが、生徒さんたちは平岡先生のご講義を聞きたくて集まってらっしゃるのですから私では力不足です、とお返事した。ただ、その時のお電話の声はいつものお元気が無く、病院の検査では問題ないと言われているのに息苦しく電話の場

小林 和子

所で立っているのもつらい、とおっしゃっていたのが気になった。いつも前向きで未来志向の先生が、自らの終活を考えて私のようなものにまで声を掛けてくださっていること自体を寂しく感じた。

一年後の去年十月北新宿で先生の遺志をうけて、追悼をこめて平岡先生についての講義をさせて頂いた。教壇には受講生の方が先生の遺影を飾ってくださっていた。

先生からお電話を頂いた翌十一月、アメリカの大学で教えている栗田さんが一時帰国した折に、彼女から頼まれてご自宅に案内し玄関先でお目にかかった時、とても痩せられていて立っているのもお苦しそうだった。その時に三人で撮った最後のお写真はお別れ会の時のスライドショーでお見せすることはばかられた。血色の良いお元気だったころの面影が消えていたからだ。

私は一昨年の春に「平岡先生を囲む会」を前年に続いて開こうと考えていたが、米寿の年に開いたほうがいいのではという教え子仲間の意見だったので延期してそろそろ準備に取り掛かなければと思っていた。しかし、先生の体調がお祝い会までに回復できるのか私はとても心配になってきた。そのためメールをなさらない先生のお宅へ、ご体調のすぐれない奥様にもご迷惑と知りながら、その後理由をつけて時々お電話をするようになった。お嬢様の携帯電話番号も教えてもらうことができ、そして、そのような事情から私は沢山の教え子の中で後輩と二人だけ最後にお目にかかることができたのだった。

私たち教え子は先生が筑波大学で教えてらした当時、毎年平岡先生の練馬のご自宅に新年会に伺っていた。私などはあずかってもらう人も無

いのでワンパク息子を連れて行き、次第に他の子持ちの先輩後輩も連れてくるようになり、大騒ぎの新年会をご自宅で開催して頂いた。平岡先生が子供たちのために景品が当たるクジをわざわざつくってくださって、息子のお正月の何よりの楽しみになっていた。幼いころ息子は平岡先生の事を「くじの先生」とずっと呼んでいた。多くの教え子が大挙して押しかけ、カラオケのマイクを話さない者や酔っぱらって眠ってしまった者、ワンパク息子などは我が物顔におうちの中を駆け回っていた。奥様が時々注意をしてくださっていたようで「さすが奥様は校長先生だった」と後から聞いて、迂闊な私は、あのような大変な新年会をご自宅で盛大に毎年開いて下さっていた奥様が小学校の校長先生であったことをその時まで知らなかったもので、とても驚いた。その後大学に務める者の妻として長く生きてきた私自身の経験から言って、あのような教え子への歓待はとてもできることでは無く、お忙しい奥様の素晴らしい内助の功だったのだと実感した。

内助の功といえば、私たち教え子は先生とコンパをして一切支払いをした覚えがない。平岡先生にいつも御馳走していただいていた。しかし、それも奥様があこの世代では珍しく先生として働いていらした上にご主人の仕事に大きな理解があったからに他ならないと思う。大学教師の生活で沢山の教え子たちに毎晩のように遅くまで飲み会をしておこり、談論風発、常磐線の終電で深夜帰宅。奥様の大きな理解が無ければ成り立たない先生の筑波大での生活だった。奥様は平岡先生の最大の理解者であり支援者だった。奥様なくしては平岡先生の偉大な業績もあり得なかつたと言えると思う。

ご遺族と先生自身のご遺志から三月十一日に行われた内輪だけの家族葬の時に、私はお願いして参列させていただいた。その時に、いつまでも愛おし気に先生のお顔をさすっていらした奥様の姿を拜見して、涙が止まらなかった。そして、平岡先生は本当にお幸せな一生だったとしみじみ思った。先生の詩にも奥様への強い思いは感じられていたが、私たちに理想の学者と教育者の姿を教えてくださいましたばかりでなく、理想のご夫婦の形をも教えて下さった。

今では平岡先生に頂いた多くのものに対して直接先生にお返しするすべはもうないが、いつもさりげなく若い私たちに御馳走してくださいっていただくことをささやかではあるが若い学生たちにも順番に伝えて行ければと思っている。それも師から授かったものを若い世代に伝えていく一つの方法ではないかと思う。

## 二、思い出

私が平岡先生に初めて出会ったのは今から四十年以上前の大学生の時だった。当時自主ゼミというのがあって、研究室から三万円がもらえるというので友達と伊豆旅行を思い立ち、はじめ川端康成ゼミを考えたがもうすでにあるとので却下され、高校時代に愛読していた井上靖ゼミを企画し、顧問の先生には一番忙しそうで干渉されなさそうな先生がいいのではということで平岡先生に白羽の矢を立てて私が講師控室にお願いに行ったのが最初の出会いだった。名前だけお借りするつもりだったため先生には集まりの日時も伝えずにいたら、ぜひ参加するので日時を教えなさいと言ってくださり、放課後ゼミを指導していただいた。私

の貴重なゼミ体験だった。

その後、卒論の指導教官を平岡先生にお願いし、私は自分の興味から三島由紀夫について書き、勝手に書き散らしたものを提出した。先生からも誤字脱字のご指摘は受けたが特別に指導をいただいた記憶はない。

平成二十八年春池袋のメトロポリタンホテルで最後の「平岡先生を囲む会」を開催した折に、先生が「三島由紀夫や川端康成なんかを研究する人の気が知れませんか」とおっしゃって、川端を研究した申さんと「先生はやっぱり三島や川端が大嫌いだったのね」と笑いあった。先生は三島についての新聞記事を見つけるとこまめに私に送って下さったが、三島文学について何かアドバイスを受けたことは無かった。でもだからこそ自由に書かせていただき、これは先生の懐の大きさを物語っている。現在大学で問題化しているハラスメントなどとは全く無縁の先生だった。干渉することなく研究者としての背中を見て育ちなさい、という感じだった。はじめは親しみやすいからという理由で指導をお願いしたのだったが、先生のすばらしさを理解するのはその後の事だった。

先生はともかくすべてにとっても公平な方だった。これはこの文学研究のような世界では非常にめずらしい。狭い世界で自己満足的に象牙の塔の中に籠り、特定の学生を溺愛したり排斥したりするような学者もいる世界の中で平岡先生は特別な方だった。学会の代表理事などの要職を退いた後も、学会にはできるだけ出席し、最前列に座って院生などの研究発表にも真摯に聞き入って手をあげて質問をなさっていた。だからこそ、かつての論敵であった小森陽一氏のような方からも一目置かれていたのだと思う。教え子以外の人からも広く慕われていたのは先生の学識だけ

でなく包容力だったと思う。先生は近代文学を志す人の憧れの存在で、違う先生について友人から私はいつも平岡門下の末端にいるだけでうらやましがられていた。大学時代勤勉な学生でもなく、コンサートや観劇にはかりうつつを抜かしていた私が大学院へ進学したこと自体友人たちは不思議がっていた。

私は大学卒業後、親の手回しで希望しない銀行勤務となり帰阪したが、親戚のコネで入社したため一年で辞める理由に大学院への進学を思い付き、大学に書類を取りに行った時に偶然平岡先生と再会して、筑波大学の院への進学をすすめて頂き、そのまま気楽に院試を受験した。私の父は高等師範、文理大出身だったので、老いて一人暮らしになるにも関わらず筑波大の院への進学には理解を示してくれた。しかし、不勉強だった私は一日目の語学試験で大失敗して、二日目の面接試験を受けずに帰ろうと思っていたが、これも運命だったのか、宿泊していた研修センターで朝食時に平岡先生とばったり出会って、今から霞ヶ浦を観光して面接を受けずに帰ります、と言ったのに対して「ともかく面接を受けなさい」と強くおっしゃってくださいと、一応受けることにした。面接では上代の伊藤博先生が「こんな漢文ができない人は困る」とおっしゃったのに対して「近代では漢文はそんなに必要ないから」と平岡先生が一生懸命おっしゃってくださいたのを今でも覚えている。

私の大学院への進学は、大学四年次の教育実習の大失敗から考えたことであり、修士を取って高校教師になるつもりだった。しかし、私が入ったのは五年一貫の筑波大特有の博士課程で、授業ははじめから研究者になることが前提となっていて、私のような不勉強でいい加減な気持ちで

入ってしまった学生にとっては全てが戸惑うばかりだった。その上、私は大学院の3年目に結婚し妊娠出産育児、そして地元民であった主人の実家での同居生活で、ほとんどゼミにも出席できないまま、院生室の机も無い幽霊学生となってしまった。結婚式の私側の主賓として出席してくださった平岡先生が二次会で「本当によかった」と何度もおっしゃっていたと伝え聞いて、先生は院への進学をすすめてしまったが、こいつはものにならないときつと後悔してらっしゃったに違いないと思った。怠け者でおおざっぱな性格の私が研究などに向いているはずもなかった。先生が永久就職した私にほっとしたのは確かだと思う。

もともとお酒の飲めない私は、ゼミの後必ず行われ、これこそがゼミ本番であると言われた飲み会に結婚後は参加できなくなった。飲み会で平岡先生は興がのつてくるといつも唱歌「広瀬中佐」を手振りをつけながら「杉野はいずこ〜」と大声で歌われた。戦中派世代である先生にとつてその歌は懐かしい歌であり、同時に先生の畢生の研究テーマも関係していたのかもしれない。

そのころの平岡先生のゼミのテーマは「日露戦後文学における家の崩壊」というものであったが、私は先生に「この辺りにはまだ日露戦争が来てないようです」と申し上げたことを今でも覚えている。先生がその時の私の意味を分かってくさったかどうかはわからないが、都会のサラリーマンの家に育った私は、当時初めて封建的な家の制度というものの対決に苦しんでいた。その実体験からようやく平岡先生の近代文学におけるテーマが私にも少し見えてきたのだ。いい加減な気持ちで院へ進学した私だったが、古い形の嫁を求められる重圧の中で反って学園

や仕事への気持ち強く持つようになっていった。早くに母を失い、父が急逝し理解者を失ってしまった当時の私は、平岡先生を父代わりに思うようになっていった。

茨城女子短期大学に就職したのはそのような私の強い気持ちからだっただ。

そして、一九九〇年、在外研究員となった主人についてアメリカのシアトルにあるワシントン大学に家族で行くことになった。短大を休職して行かせてもらったので私もワシントン大の日本文学を聴講させてもらえないかと思いい、滞在していたホテルのフロントの流暢な日本語を話す若い女性スタッフに紹介されて日本語日本文学のトリート先生の研究室を訪ねた。そうすると私の履歴書を見た彼から「平岡先生のお弟子さんならちよいどいい。サバティカルの先生の授業をどうしようかと悩んでいたところなので、ぜひここで教えてもらいたい」と言われたのだった。私は急にジザをJ2からJ1に切り替えて、ワシントン大のアジア言語文学科日本語日本文学コースの客員講師として大学院生らを教えるという貴重な機会を得ることができた。これもひとえに平岡先生の国際的なご高名の賜物だった。私自身はあまりに親しい存在だったため、平岡先生の国際的名声に気付いていなかった。ワシントン大での貴重な経験は私が日本語教育の分野にも興味を持つきっかけにもなり現在もつくば市の日本語ボランティアとして講師を務めることにもつながった。

戦中世代の先生は決して流暢な英語を話されるわけではなかったが、一人で外国どこへでも出かけてしまう方だった。私の帰国後シアトルに一人でいらした先生はワシントン大の元同僚の森の中の家でバーベ

キューパーティーでもてなされたようで、そのことを嬉しそうに私に何度も語ってくださった。

また、アメリカの大学での芥川の講義をテキスト化して筑波大のゼミで使い、私たちに日本文学研究のグローバル化の可能性を身をもって教えて下さった。

平岡先生は筑波大学の定年の一年前にご退官されたため、最終講義は内輪の研究会で行われた。私は近在に住んでいたため拝聴させていた。

先生は其中で、文学研究の基本は文献にあり、残された文献は裏切らない、とおっしゃった。これは、外来の方法論に振り回されている学会などへの警鐘のように思われた。テキスト論、フェミニズム批評、カルチュラルスタディーズなど私知っている範囲でも変遷している近代文学研究の分野に、戦中の軍国主義、戦後のマルクス主義の洗礼を受けてきた先生が文学研究というものに出会った時に見つけたそれが、最も大事なことだったのだと思う。

私にとって平岡先生に感謝していることはもう一つある。それは文学散歩の重要性と楽しみを教えて頂いたことである。

平岡先生は学生時代から作品の舞台などに実際に訪れることを大事にして文学散歩を主宰してらしたが、私は幽霊院生だったため学生時代に参加したことは無かった。しかし、平岡先生が筑波大を退職なさって群馬女子大学の学長になられてから群馬女子大の市川先生と平岡先生が中心となって毎年十一月二十三日の一葉忌に行われる文学散歩に参加させていたのだようになった。それは私がNHK文化センターで「文学散歩」

をすることになったためでもあったが、私にとっては平岡先生や若い群馬女子大の学生さんたちと歩くのが年に一度の楽しみでもあった。

平岡先生は歩くのがすぐ早くて先生の後を私は小走りで追いかけることが多かった。お酒好きの先生ではあったが、酔っぱらってしまわれることは一度も無く落ち着きなく次々にお店を変えた。縄のれんの大衆的な飲み屋がお好きで、義理堅い先生は席が温まる暇もなく、ごひいきのお店をはしごするのだった。連れて行っていた高田馬場のガード下のお店や常磐線荒川沖駅近くの「すみれ」というおひいきのお店を懐かしく思い出す。谷崎潤一郎の愛人だったとかいう上品なおかみさんがやっているお店にも連れて行っていたこともあった。日本文学研究家の有名なサイデンステッカー氏もここでは「サイデンさん」と呼ばれていた。

文学散歩では先生のお仲間の、論文だけで知っていた高名な先生方もご一緒に、本当に楽しかった。いろんな所へ連れて行っていたが、一葉記念館は勿論、浅草や銀座や文京区の坂の街を沢山歩いた。そして、そこで先生から貴重なレクチャーを頂くことができた。そして、最後にいつもいろんな大衆酒場で打ち上げをした。

文学散歩のあと、毎年新年会の場所と日程を決めるのも恒例となった。いつの日かその文学散歩の中で健脚だった先生が学生のみんなから遅れるようになっていった。そして次第に平岡先生とご一緒にするのが私の役目になっていた。芥川の生育地の両国の回向院や一葉記念館の前のベンチでしばらく座っていたこともあった。

そしてこの文学散歩の最後は平成二十八年秋の文学散歩だった。先生

は鴉外の作品にもある鼠坂の下で皆に解説をした後、坂を上っていく皆を見送って、一緒に音羽の通りからタクシーで池袋に出た。西武池袋駅で見送った少し寂しそうだった先生の後姿が今でも印象に残っている。私は学会にも平岡先生が出席されると聞くと先生にお目にかかるためもあって近年はなるべく出席するようにしていた。最後は日本近代文学会が東大駒場であった時だった。

私は普段懇親会に出ないのだが平岡先生が出席されるといので懇親会に出席して先生のおそばにいた。先生の所に主催者の小森先生や沢山の有名な研究者が挨拶にいらして私は先生のおかげでこの場所にいられる幸せを感じた。その時女性研究者として有名な江種先生や渡辺先生から、「あなたはちゃんと平岡先生をガードしなくてはだめよ」と言われた。その帰りの山の手線の中で並んで座っていたが、急に地震が起こり電車が不通になってしまった。先生は一人で帰れるとおっしゃったが、携帯電話を持ってらっしゃらない先生の代わりにお嬢様にお電話して目白駅まで迎えに来ていただいた。

私の父は山登りに出かけたまま一人で七十五歳で逝ってしまった。私は教え子としては全くダメな弟子ではあったが、お元気の塊のような先生が少しづつお年をめされて行くのをおそばに居て見守ることができたことが寂しい反面ありがたかった。

これからも平岡先生から教えて頂いた、物語の舞台になった場所に実際に足を運んで作品を深く読む、ということが続けていきたいと思う。思わぬ発見が文学散歩にはあるからだ。

### 三、略年譜と業績、お別れ会について

本当であれば、教え子たちが先生の業績や年譜を作成するのが常套ではあるが、何よりも用意周到で完璧だった先生は、書誌研究者の鈴木一正氏と一緒に生前に『波路遙か―平岡敏夫著作目録・参考文献目録・年譜』（鈴木一正編、二〇一一年十二月二十五日、青鷺舎）を自ら作成なさった。青鷺舎の場所は先生のご自宅である。これをもとに、昨年六月二十四日茗溪会館で開催した「平岡先生お別れ会」の折に私が作成した略年譜を次にあげさせていただく。

#### 〈平岡敏夫先生略年譜〉

一九三〇年（昭5）三月一日、香川県多度郡広島村（現丸亀市広島町）に生まれる。広島は瀬戸内海の塩飽諸島の一つ。父伊津次、母トセの三男、実質的長男（長男、次男早世）として生まれた。姉四人と弟、妹がいた。

一九四四年（昭19）広島国民学校高等科修了後、四月大津陸軍少年飛行兵学校へ入学。

一九四五年（昭20）大津陸軍少年飛行兵学校卒業後、対空射撃部隊の一員として盛岡で終戦を迎える。

一九四六年（昭21）香川師範学校予科へ入学。

一九五〇年（昭25）香川大学文学部国語科入学。

一九五一年（昭26）文芸部で詩同人「列」に参加。

一九五四年（昭29）香川師範学校で出会った豊子夫人と結婚。詩集『愛情』（香川大学文芸部）刊行。

一九五六年（昭31）一月母トセ死去。四月東京教育大学大学院文学研

究科修士課程日本文学専攻入学。吉田精一教授に最初の近代文学専攻の学生として薫陶を受ける。

一九五八年（昭33）四月東京教育大学大学院文学研究科博士課程日本文学専攻入学。

六月「北村透谷と『昆太利物語』」（『明治大正文学研究』）を発表。十月、長男可奈之氏誕生。十一月「芥川龍之介序説」（『進路』）発表。

一九六一年（昭36）九月日本近代文学会秋季大会で「透谷試論―『国民』へのアプローチ」を発表、三好行雄、越智治雄らの「文学史の会」に参加。

一九六二年（昭37）三月東京教育大学大学院博士課程修了（単位取得満期退学）。十二月、長女可奈子氏誕生。

一九六六年（昭41）都立高校教諭を経て、四月大東文化大学専任講師、翌年東海大学文学部助教授。六月、日本文学協会にて「夏目漱石研究史論」講演。

一九六八年（昭43）四月横浜国立大学教育学部助教授。

一九七一年（昭46）一月「坊つちゃん試論」（『文学』）発表。四月日本女子大学非常勤講師

師（昭56）。七月『続北村透谷研究』（有精堂）刊行。香川大学などで集中講義。

一九七六年（昭51）四月筑波大学文芸言語研究科教授。十月『漱石序説』（塙書房）刊行。

一九八二年（昭57）一月「北村透谷研究三卷」（有精堂）刊行。十一月「芥川龍之介―抒情の美学―」（大修館書店）刊行。北京日本語研修センター

で講師を務め、中国各地を巡る。

一九八五年(昭60)五月『日露戦後文学研究 上』(有精堂、下巻は七月刊行。漱石、鴎外の足跡を訪ねてヨーロッパを旅する)。

一九八七年(昭62)八月フルブライト教授としてアメリカ・ペンシルベニア州のディキンソン大学にて芥川について集中講義。家族でアメリカ一周旅行。九月『漱石研究』(有精堂)刊行。

一九八八年(昭63)四月筑波大学大学院芸言語研究科科长。

一九九〇年(平2)一月三月『昭和文学史の残像Ⅰ、Ⅱ』(有精堂)刊行。四月『漱石日記』(岩波文庫)刊行。

一九九一年(平3)豊子夫人が練馬区立光が丘第三小学校校長として定年退職。五月『塩飽の船影』(有精堂)刊行。

一九九二年(平4)三月筑波大学退官。筑波大学名誉教授。四月群馬県立女子大学学長。

一九九五年(平7)七月『芥川龍之介と現代』(大修館書店)刊行。韓国で講演。

一九九六年(平8)四月日本近代文学会代表理事就任。十二月『石川啄木の手紙』(大修館書店)刊行。

一九九六年(平9)七月岩手日報文学賞啄木賞受賞。

一九九八年(平10)三月群馬県立女子大学学長を退官し、群馬県立女子大学名誉教授。

一九九九年(平11)九月『ある文学史家の戦中と戦後―戦後文学・隅田川・上州』(日本図書センター)刊行。

二〇〇〇年(平12)一月『漱石 ある佐幕派子女の物語』(おうふう)

刊行。六月北村透谷研究会会長。

二〇〇一年(平13)四月日本学術会議の代表としてスウェーデンとノルウエーのノーベル賞授与機構を訪問。日本学術会議のノーベル賞百年記念フォーラムで「文学における創造性」講演。

二〇〇三年(平15)八月詩集『塩飽』刊行。

二〇〇四年(平16)十月『夕暮れ』の文学史(おうふう)刊行。十二月詩集『浜辺のうた』(思潮社)刊行。

二〇〇六年(平18)九月詩集『明治』(思潮社)刊行。台湾などで講演。瑞宝中綬受賞。

二〇〇七年(平19)叙勲と喜寿を祝って二月十七日に「平岡敏夫先生を祝う会」(茗溪会館)開催。十月詩集『夕暮』(鳥影社)刊行。

二〇〇八年(平20)五月『夕暮れの文学』(おうふう)刊行。

二〇〇九年(平21)四月『北村透谷 歿後百年のメルクマール』(おうふう)『北村透谷と国木田独歩』(おうふう)刊行。八月詩集『蒼空』刊行。

二〇一〇年(平22)五月『文学史家の夢』(おうふう)

二〇一一年(平23)十二月鈴木一正編『波路遙か―平岡敏夫著作目録・参考文献目録・年譜』刊行。

二〇一四年(平26)八月詩集『月の海』刊行。

二〇一五年(平27)八月現代詩文庫216『平岡敏夫詩集』刊行。十月『明治文学史』研究 明治篇(おうふう)刊行。

二〇一六年(平28)三月教え子有志が集まって「平岡先生を囲む会」(メトロポリタンホテル)を開く。



二〇一七年（平29）一月詩集『塩飽から遠く離れて』刊行。四月『夏目漱石―「猫」から「明暗」まで』刊行。

二〇一八年（平30）三月五日逝去。享年八十八歳。戒名は塩飽院広文透敏居士位。戒名は先生自らが作られたものである。

昨年九月二十五日発行の『波路遙か―補遺―』の最後には「正四位の叙位」を受けたこと、お別れ会の当日に皆様にお遺族から進呈され、入院中にも校正をなさっていたという先生の遺作である詩集『在りし日の証に』（思潮社）や故郷塩飽諸島の先祖代々のお墓と、先生が戦争中飛行兵として赴任していた所沢の墓地と、そして富士霊園の日本文芸家協会「文学者の墓地」に分骨されたことも記されている。

平岡先生の書誌目録は『波路遙か』二冊に詳しいので、ただここでは、略年譜を作成しながら私が確認できた、平岡敏夫先生のご業績と文学者としての軌跡を簡単に紹介しておきたい。

塩飽諸島に生まれた平岡先生は高等小学校修了後、戦争中は大津陸軍少年飛行学校に進み終戦を迎えた。戦後、師範学校予科から新制の香川大学に進学され、そこでマルクス主義の洗礼を受けるとともに、同人誌に詩や小品を書いて文学青年となっていく。香川師範学校時代に知り合った奥様と結婚し、二年ほど隣の愛媛県の中学校で教鞭をとり、ご母堂トセ様の逝去の後上京し、東京教育大学大学院に進学。そこで日本近代文学研究の先駆者ともいべき吉田精一教授の最初の教え子となった。ここから平岡先生の近代文学研究者の道が始まった。

先生の最初の近代文学研究は漱石と北村透谷だった。そのあと芥川龍

之介や日露戦後文学と続き、文学史家という言葉も本のタイトルにも使われるようになっていく。

そして、筑波大学退官の前年に『塩飽の船影』を出版され、自らのアイデンティの在処である「塩飽」を前面に、（日本の近代とは何か）という大きな問いを自らの原点に問い始める。そして、群馬女子大学学長を退官後、日本学術会議の大きなお仕事を引き受けられたが、それを終えられたあと、初めての詩集『塩飽』を刊行され、詩人としての活躍を本格的に始められた。同時に近代文学研究の集大成ともいべき『文学史家の夢』を語り、現代詩文庫『平岡敏夫詩集』が刊行され、詩人として名を残すことになり、一方文学史家としても『漱石―「猫」から「明暗」まで』を完成させた。

そして、『波路遙か』『波路遙か―追補―』で自らを総括して見事な生き様を私たちに示して旅立たれた。残された著作は六十作を超え、論文は四百本を超えている。

次に、昨年六月二十四日に茗溪会館で私たち教え子有志が開催した「平岡先生お別れ会」の式次第をあげておきたい。

#### 式次第

- 一、参加者献花
- 一、開式の辞―阿毛久芳先生
- 一、黙祷
- 一、詩の朗読「塩飽から遠く離れて」（陶原葵様）
- 一、ご挨拶―渡邊正彦先生
- 一、ご挨拶―北原保雄先生

一、献杯の辞―小内一明先生

一、歓談

一、ご家族からのご挨拶

一、閉会

多くの筑波大学創成期の教え子が古典の専攻の方も含めて、北海道から九州まで、そしてアメリカや韓国や台湾からも駆けつけてくれ、さながら同窓会のような雰囲気になった。多くの参加者から、久しぶりに旧交を温められたと感謝の言葉をいただいた。にぎやかなことが何より好きだった先生のおかげで昔の仲間が集まることができ、先生もお喜びであったと思われる。

体調が心配された奥様をはじめ、ご長男、ご長女とお孫様もいらして下った。先生のお宅で暴れていたワンパク息子も顔を出して、久しぶりに奥様にご挨拶ができたのだった。

ご家族からは遺稿集である『在りし日の証に』が、群馬女子大学からは最後の紀要論文が、そして私も筑波大学の教え子たちからとして、お酒が何より好きだった平岡先生にふさわしいと思い、筑波大ブランドの銘酒「桐の華」を参列の方にお持ちいただいた。

元筑波大学学長で国語学大家である北原先生からは、良いお別れ会だったよ、とお声をかけていただき、ほんの少し平岡先生にお返ししてきましたような気がした。

#### 四、先生の小説について

詩人として名を残すことになった平岡先生ではあるが、研究者として

は韻文の分野の研究者ではなかった。現代詩文庫にも収められることになった詩人としての平岡敏夫先生については、韻文研究が専門の先輩や後輩が研究してくれると思うので、ここではその業績の中では目立つことはなかったが、数少ない散文作品のいくつかについてここでは少し触れておきたい。

『塩飽の船影―明治大正文学藻塩草―』（1991・5、有精堂出版）の「Ⅵ塩飽・藻塩草」とされた最後の章の〈詩〉（スケッチ二題）の最後に〈小説〉として「母の歴史」「墓標」「疑惑」「長等山」が収録されている。全て研究というものと出会う前の習作である。

「母の歴史」に書かれているのは塩飽という瀬戸内海の島で生き、家族のために働き続けた母への追慕が虚構を交えて描かれている。長兄、次兄が夭折し、跡取りとなる三男の山田俊造は予科練に行ったが失望して郷里に帰ってくる。高松の大学で運動をして警察がトシのもとを訪ねて来るが母・トシは「今、俊造達がやっていることは、勤王の志士のやったこととおなじだ」と言い切る。

平岡先生は、先生が創刊した筑波大学の院生が主体となった雑誌「稿本近代文学」（第十六集、一九九一、十一）の中で、この作品を読んだ姉から、あまりに母の人生を暗く悲しいものに書きすぎていることを指摘された、と書いている。お姉さまは娘の立場から母の人生にも明るく幸せな一面があったことを弟の先生に伝えたかったのであるが、日本のな家族制度の中で激動の時代を片田舎の島で必死に生き抜いた母への息子の思いが、悲劇性を帯びているのは、このころ郷里や母と別れて文学研究を志し上京する決意をした先生の苦渋が滲んでいるからであろう。

平岡先生の原点に自然主義的な習作があったことを私は今さらながら確認させられた。

「墓標」は一人息子を高商まで出しながら戦死させてしまった母と子の墓標を目にしながら、自らの戦争中の飛行学校時代を回想し自らの母の事を思う小品。

「疑惑」は、中学教師をしている「私」が転校すると言ってきた「たけし母子」が無理心中をするつもりなのではないか、と危惧する話である。

「長等山」は陸軍少年飛行学校生徒二人の新聞への投稿を軸に、死の床で甥に財布を渡そうとする伯父や父や母の事が書かれた自らの軍隊体験を描いた小品である。ちなみに長等山は大津陸軍飛行学校の近くにある山で、作品冒頭で、比叡山などと比べると目立たない山で、自らを士官学校など軍隊エリートと比している。ちなみに「長等山」という雑誌は大津陸軍少年飛行学校の同窓会報の名前にもなっている。自らの近代文学史に対する暗い視点の原点としてこの作品を先生自身が小泉氏との論争の中で上げている重要な作品である。

この『塩飽の船影』が出た時の書評「ある文学史家の《原風景》を読む」(『日本文学』四十一集、一九九二・十二)で、杉野要吉氏は冒頭「平岡敏夫は戦後の近代文学研究史のなかで、一貫して『文学史』のヴィジョンを自覚的に定立し、研究を展開してきたひとである」と書き、これらの初期習作にも触れて、「敗戦体験の上に立った戦後青年としての思想的進路を、どのように選び取り、どのようなジグザクの過程を経て、近代文学研究に道を見出していく」のかを示唆する重要な作品と評する。

私には、壮大な平岡先生の文学史家としての業績に何も言えるような

力はないが、私はずっと四十年以上おそばにいて感じていた、パワフルで闊達で常に前向きな平岡先生の原点が、このような自らの寂しい原体験やコンプレックスにあったという事は大事なことだ。

先生がこの本のあとがきに「(塩飽)に象徴される(日本の近代化)(地方)(僻地)(貧困)(戦争体験)(昭和二十年代)等の問題を、明治大正の文学と重ね合わせることで、もう一度自身の原点・原像として確認したい」と書かれている意味を、深くこれから検証してみたいと思う。

## 五、おわりに

我が家の和室の机の上に平岡先生から頂いた、そしていくつかは私が買い求めたご著作が四十冊ほど並べてある。そこは仏壇の無い我が家の最も大切な場所、横には私の両親の写真なども置いてあり、息子が生まれた時に平岡先生から頂いた大きなクマのぬいぐるみも一緒に座っている。昨年六月二十四日に「平岡先生お別れ会」を終えてから、ずっとそこは私の特別な場所になっている。

私はこれからの第二の人生をかけてこれから平岡先生のご著作と向き合っていこうと決心している。

最後に、先生の晩年の代表的な詩を一篇上げて、ペンを置きたい。  
平岡敏夫先生、本当に長い間ありがとうございました。

塩飽から遠く離れて

戦後七十年、知己、友人はほとんど去り、

いつ死んでも自然とだれでも思う年齢になりました。

敗戦は、陸軍少年飛行兵一年半、所沢飛行場連日空襲、

疎開先の盛岡の岩手山麓でありました。

戦後五年、朝鮮戦争、警察予備隊（保安隊、自衛隊）、

再軍備反対闘争に参加、校舎に長い壁詩を貼りました。

戦後九年、小さな詩集で父母、姉弟、恋人、スターリンの

死までうたったのであります。

戦後十五年、「安保反対」、国会前、腕を左右に組む充実、

解散後、仲間で飲むビールは格別なのであります。

戦後二十年、雑誌に「戦後二十年の文学史像」を書きました。

自我と民族、透谷、啄木、竹内好、……

戦後二十五年、全共闘運動、バリケード封鎖、ロックアウト、

焚火の側で『己が罪』を再読していたのであります。

戦後四十年、筑波山麓、さらに赤城山麓、通勤片道二時間半、

必ず座れて本がよく読め、短い原稿も書けたのであります。

戦後六十年、五十年ぶりに詩集を出し始め、瀬戸内、塩飽水軍、

故郷をうたい、浜辺を消したコンビナートに怒り、蒼空の少年

飛行兵の霊を悼み、大津波の子供らをうたったのであります。

戦後八十年、塩飽の浜辺の墓原に眠っていたのであります。

廃家、廃家、竹藪が襲い隠し、墓原に人影なし、でありました。

むかし、ダブリンで作った詩を思い出していたのであります。

小さな島国のアイルランドと日本。

その日本のなかの小島から遠く離れて。

（「ダブリン市民」、詩集『塩飽』より）

同時に王頭山頂の上の遙か蒼空を漂っていたのであります。

十代後半で空に散った多くの先輩たちに拳手の敬礼をしたのであります。

た。

塩飽から無限に遠く離れて。

（詩集『塩飽から遠く離れて』）

